

学校名		氏名	
-----	--	----	--

【1】次の文章を読んで設問に答えなさい。

<2001年10月24日付読売新聞「編集手帳」より>

小豆島の小高い丘に作家、壺井栄の文学碑を訪ねたことがある。故人が生前、色紙に好んで書いた言葉が刻まれていた。「桃栗三年 柿八年 柚の大馬鹿 十八年」◆桃やクリは芽生えてから三年、カキは八年で実がなる。それに比べてユズの成長は遅く、容易に実をつけない。時に周囲から愚か者であるかのように見下される、と、そんな意味のことわざらしい◆長い歳月を辛抱して実を結ぶユズに、下積みに耐える人の愚直さを重ね、栄はいとおしさを覚えたのだという。「二十四の瞳」の大石先生が教え子たちに向けたようなまなざしでユズを見つめていたのだろう◆最近、目を引いたニュースに「将来への夢」と題する小学生調査の結果がある。「がんばったら、なれると思いますか」の問いにうなずいた子供は、「大会社の社長」17%、「優れた大学教授」16%、「世界的な芸術家」21%…◆米・韓・台との比較で最低という。名をなすだけが人生ではないから嘆く必要はないとしても、「どうせ自分は桃やクリではないから」とでも言いたげな、このあきらめのよさ、見切りの早さはどうだろう◆せわしない時の流れに世の中がつい、栄のまなざしを忘れがちなせいでもあるのか。その実が金色に熟れる季節、ちょっと気になる。子の置きし柚子に灯のつく机かな（飴山実）

問1：「桃やクリ」は何の比喩か？

問2：「栄のまなざしを忘れがち」とは、どういう傾向のことか？

問3：筆者が「ちょっと気になる」のは何か？(25字)

【2】次の文章を読んで設問に答えなさい。

<2001年10月24日付読売新聞「基調講演 石川好氏さん」より>

国際社会で働く日本というものをイメージした場合に、行動に結びつく言葉は常にアメリカ製の外来語だ。湾岸戦争の際の「コントリビューション（国際貢献）」もそうだし、今回の同時テロ事件における「ショー・ザ・フラッグ」もそう。日本の感覚にそぐわない言葉をわかりにくい日本語に翻訳して動くのだから、その行動が右往左往してしまうのも当然だ。

つまり、「世界の中の日本人とは」「我々は世界とどう結びつくんだ」という自発的な問いかけができていないということ。根っこになる言葉を自分のものにできないまま行動しているという弱点が、日本にはある。日本が得る世界の情報が、常にアメリカの二次情報、三次情報でしかなく、自らの手で得た情報がなさ過ぎることに原因がある。

一番大事なことは、日本が世界とどう結びついていくのかという足元を確かに行きとすることだろう。自分の足元さえふらついている状態で、何で世界に貢献できるのか。足手まといになるだけだ。外国人の受け入れ、経済援助など、自分が何ができるのかという足元を、日本は見なければならない。その役割をきちんと果たすことで、経済大国である日本は、世界に対してかなりの貢献ができると思う。

問1：この基調講演のテーマは何か？ 7字以内で答えなさい。

--	--	--	--	--	--	--

問2：講演者の主張を30字以内でまとめなさい。


問3：「ショー・ザ・フラッグ」で「右往左往」したとはどういうことか？